ツヴァイク全集

6

心の焦躁

大久保和郎訳

みすず書房

心の焦躁

大久保和郎訳

みすず書房

ツヴァイク全集 6

心の焦躁

大久保和郎訳

1974年5月10日　印刷
1974年5月20日　発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京195132
本文印刷所 三陽社
カバー・表紙印刷所 栗田印刷
口絵印刷所 京美印刷
製本所 鈴木製本所

©1974 in Japan by Misuzu Shobo
書籍コード 0398-00061-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

心の焦躁

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

まさに同情（ミットライト）には二種類あるのですよ。一つは気の弱い感傷的な、実はただ他人の不幸を見てやりきれない思いをしている状態から一刻も早く解放されたいという心の焦躁にすぎぬもの、つまり、決して共に悩む（ミット・ライデン）ということではなく、他人の悩みから自分の魂を本能的に守ることにすぎぬ同情です。もう一つの同情は、これこそ同情として考えられるべき唯一のものですが――感傷的でない、創造的な同情、自分が何を為さんとするかを知り、そして辛抱強く共に耐えながら自分の力の最後の限界まで、いやさらにその限界を越えてまで貫き通そうと決心している同情です。

（二五六頁）

英訳書への原著者の序文

イギリスの読者諸君には恐らく短い解説が必要であろう。オーストリア＝ハンガリア陸軍は極めて多数の民族および人種によって構成されている一帝国のなかで、一定の形にまとまった純一な団体をつくっていた。イギリス、フランスのみかドイツの軍人とも異なって、オーストリアの将校は勤務を終えてからでも平服を着ることは許可されていなかったし、軍紀はその私生活においても常に《standesgemäss》〔身分相応に〕――すなわち、オーストリアの軍人階級の特殊の礼式典範に依拠して行動すべきことを命じていた。同一の階級に属する将校同志では、個人的に面識のない者ですらも、たがいに敬語の第三人称複数《Sie》で話しかけることはなく、打ち解けた第二人称単数の《du》を使うことになっており、これによって軍人階級内のあらゆる成員の親和と、彼らを一般人と分つ深い溝とが強調されていたのである。将校たるものの態度行動の決定的な基準をなすものは、一般社会の道徳の掟ではなく、彼らの身分の特殊な道徳の掟であり、そしてこのことがしばしば精神的葛藤を惹き起した。そのような葛藤がこの書のなかで重要な役割を演じている。

シュテファン・ツヴァイク

「それ誰にても、有てる人は与へられて愈〻豊ならん」〔マタイ伝第十三章第十二節〕、この聖賢の書のなかの言葉をあらゆる作家は安んじて次のような意味に強調して差支えない。「それ誰にても、多く語りし者には、語らるることも多かるべし」と。詩人のうちには間断なく想像力が働いており、詩人は無尽蔵の貯えのなかから小止みなく事件や物語を作り出して行くのだというあまりにも世上一般のものとなっている観念こそ、この上なく誤ったものなのである。実は、詩人は創作するかわりに人物や事件がおのずから発見されて来るのにまかせていさえすればいいのだ。これらのものは、詩人が研ぎすまされた眼と耳の感覚の力を保持しているかぎり、絶えず彼を自己の再現者として求めているのである。幾度となく人間の運命を解き明かそうと試みたものには、多くのものが自己の運命を語る。

以下に述べる事件もほとんどその全体がここに再現されているような形式で私に打明けられ、しかもまったく意外なことで打明けられることになったのだ。最後にヴィーンに行ったとき私は或る晩いろいろな心配に疲れはてて或る郊外町の料理店を尋ねて行った。私はこの店がもうとっくの昔に廃れてしまって大して繁昌もしていないだろうと臆測して行ったのである。けれども一歩足を踏みこんで私は自分の誤りに気がついて腹立たしくなった。はいるとすぐ一番手前の食卓から一人の知人が心からの喜びを満面に浮かべて立上り、

私の方では勿論それほど夢中になって彼の喜びに応えたわけでもないのに自分の食卓に坐るように勧めてくれた。この慇懃な紳士が個人として鼻持ちならぬ乃至は不愉快な人物であったといえば、それは嘘だろう。この男はただ子供が郵便切手を蒐集するのと同じような熱心さで知人を沢山つくり、それゆえにまた自分の集め得た知人の一人一人を何か特別に自慢の種としているといった社交的な人種の一人だった。このお人好しの変り者――かねて甚だ博識で有能な記録保管人であるが――は、時折り新聞に出るあらゆる人の名前にいかにも気取った気易さで、〈これは私の親友なんですがね〉とか〈ああ、この男なら私は昨日逢ったばかりですがね〉とか註釈を加え、或は〈私の友人のAが私にこう言いましたがね、私の友人のBの意見では〉といった調子で平然としてアルファベットを全部一通りやってしまえるような身分になれれば思い残すことはないと、あらゆる人生の意味をこの謙抑な希望の実現にのみ求めていたのである。友人になった最初の日から彼はきまってその友人をさんざん褒めちぎる。どの女優にも公演の翌朝には電話をかけて祝辞を述べる。誰の誕生日もおぼえている。面白からぬ新聞記事については沈黙をまもり、賞讃の記事がのれば心から喜んで切抜いて送ってやる。だから決して我慢できない人間ではなかった。心から人に親切なのであり、誰かがちょっとしたことを頼んで来たり、あるいは彼の交際の珍品展覧室に新顔の珍品が殖えたりすると、それだけでもう彼は有頂天だったのだ。

しかしわが友《Adalbei》――ヴィーンではこの愉快なからかい言葉によって、種々雑多な流行人士のグループのなかに寄生しているあらゆる種類のお人好したちを普通十把一からげに総称しているのであるが――についてこれ以上詳しく述べる必要はない。なぜならこういう連中のことは誰でもよく知っているし、少々手荒くきめつけてやらなければ彼らの感歎すべき無邪気さを撃退することができないということも誰しも心得

ているからである。それ故、私は諦めて彼のそばに腰をおろし、べちゃくちゃしゃべりながら十五分ほどたったとき、髪の毛はもう目立って白くなっているのに艶々した若々しい顔色をしているので人目を惹く背の高い紳士が店のなかへはいって来た。歩くとき一種独特に背中をしゃんと伸ばしているところから、一目見て退役の軍人だということがわかった。私と一緒にいた男は例の持ち前の慇懃さで挨拶するために飛上った。ところがこのせきこんだ挨拶に対して相手の紳士は鄭重というよりむしろ冷淡にうなずきかえしただけだった。だがこの新来者が急いで駈けよって来たボーイにまだ註文も終っていないうちに、わが友アダバイはもう私の方ににじりよって小声で私に囁いた。「あれが誰だか御存知ですか?」私は自分のコレクションのなかの大して面白くもない品目をいやに称讃しながら御披露に及ぶという彼の蒐集家としての誇を昔から知っていたし、また馬鹿に長ったらしい説明を聞かされるのも閉口だと思ったので、全然興味がなさそうに「いいえ」と答えてかまわず自分の菓子を切りつづけていた。しかしこの私の冷淡さも名士の名前を吹聴するのが道楽のこの男をますます昂奮させただけだった。そして用心深く片手を口にあてて声を立てずに彼は囁いた。「だがあの人は軍事参議院のホーフミラー大将ですよ——名前ぐらい御存知でしょう——あの戦争の時マリア・テレジア勲章を賜わった人です」ところがこの事実を聞かされても彼が思っていたほど私が驚いた様子もなかったので、まったく愛国的な教科書にでもあるような熱狂ぶりでこのホーフミラー大尉が戦争中どれほどの偉勲をたてたかを彼は滔々としてならべたてはじめた。最初は騎兵だったが、後にピアヴェ河〔北部イタリアの河。アルプスより発してアドリア海に注ぐ。この河の線で一九一八年イタリア軍がオーストリア軍を撃破した〕上空の偵察飛行で単独で敵の三機を撃墜し、最後には機関銃中隊に属して三日間も前線の堡塁を占拠し固守しつづけた——こういったことを一々個々の例まで挙げて（それはここでは省略するが）述べ、しかもその合の手には、カール皇帝御自身からオーストリア陸軍

のなかでも滅多にもらう人のない勲章を授与されるという破格の栄誉を受けたこの偉丈夫のことを私が一度も聞いたことがないというので、まったくもって驚き入ったようなことを言うのであった。

思わずその話につられて私は、歴史の判定を受けた英雄というものをわずか二メートルばかりの距離で一度眼に入れておこうとそちらの机へ視線をやった。ところが私は厳しい怒りを含んだ視線にぶつかってしまった。その眼つきはおよそこんなことを言っているようだった。〈その男が私のことで何かおまえに法螺を吹いたのではないか？　何も私のことを馬鹿面して見とれる必要はないんだぞ！〉それと同時にその紳士は目に見えて無愛想な動作で椅子をわきにずらすと、ぷいと私たちに背を向けてしまった。いささかきまりの悪い思いで私は視線をもどし、その後は珍らしそうにそちらのテイブルの蔽いにちらと眼をやることさえ私は慎しんだ。その後間もなく私はこの気の好い饒舌家に別れを告げたが、しかし店を出がけに早速彼があの英雄の方に席を移しているのを私は目に留めた。多分今度は、先程あの人物について私にいろいろ教えてくれたときと同じくらいの熱心さで、彼に私のことを話して聞かせるためだったのだろう。

それだけの話である。眼と眼を見かわしたというだけで、このままならきっと私はこの忽卒の邂逅のことなど忘れてしまったろう。ところがまた偶然のいたずらで、早くもその翌日に私は或るささやかな社交上の会合の席上でまたもやこのそっけない紳士と相対することになったのである。しかも彼は夜会に出るためスモーキングを着ていたので、前日はるかに軽快なホームスパンを着ていたときよりももっと目に立ちやすい垢抜けした印象を与えた。私たちは両方とも或る微かなほほえみ、かなりの人数のなかでほかの誰にも知られぬ秘密を共有している二人の人間のあいだに交わされるあの意味ありげなほほえみを押匿そうとして苦心した。私が彼を認めたのと同じように彼もはっきり私を認めたのである。そして多分私たちは、昨日のあの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

へまな真似をしたうるさい男のことでも、怒るにしても面白がるにしてもやはりおたがいに同じような気持で怒り乃至面白がっていたのだろうと思う。はじめ私たちはたがいに話すことを避けていた。しかし私たちの周囲では早くも熱した議論がはじまっていたので、話を避けようとすることなどはどうせできない相談だったのだ。この議論の題目が何であったかということは、この議論が一九三八年に行われたものであると一言いえば、言わぬ先から予測され得るだろう。後世われわれの時代の記録を書くものは、一九三八年にはこの悩み悶えるヨーロッパのありとあらゆる国で、ほとんどすべての会話が新しい世界戦争の勃発の可能性ありやなしやについての予測に終始していたということを必ずや確証し得るであろう。寄るとさわると必ずこの話題が皆の心を捉えてしまう。そして時としてはこういう推測や希望に自分らの不安を紛わしている人々が存在するのでなく、いわばそのような雰囲気そのものが、つまり言葉となって躍り出ようとする、目に見えぬ緊張を孕んだ動揺する時代の空気が存在するだけだというような感じさえした。

家の主人は弁護士を業としている決して自説を枉げぬ性質の人だったが、このとき会話を牛耳っていた。彼は世間一般によく使われている論法で世間一般と同じ愚にもつかぬことを言っていた。すなわち、新しい世代は戦争というものはどういうものであるかをよく知っているから、新しい戦争が起ってももうこの前の戦争のときのように不用意にそのなかへはまりこむことはあるまい、というのだった。もう動員と同時に銃の筒先は敵とは反対の方に向けられるだろう。特に自分のようにかつて前線で戦ったことのある兵士は、自分たちを待っているものが何であるかを忘れてはいない、と。現在この一時間にも何万何十万とも知れぬ工場で爆薬や毒ガスが生産されているのに、まるで人差指でちょっとはたいて巻煙草の灰を落すといった気楽さで戦争の可能性を一笑に附する、知ったかぶりのその確信が私には癪にさわった。私は断乎として、実現

してもらいたいと思うことを必ずしも常にそのまま現実であると信じてはならない、と答えてやった。私は言った――戦争機械を管理する官庁や軍事機関はすべて不眠不休の活動をつづけ、われわれがユートピアを描いて陶然としているあいだに彼らは平和期間を十二分に利用して、すでに事前に大軍を動員し謂わば射撃姿勢を取らせて確保しておくように努めている。現在の平和のなかですでに一般の服従心は完璧な宣伝の力によって信ぜられぬほどのものになっている。そしてひとたびラジオが動員の布告を家々に報じたその瞬間からは全然反抗などは期待できないという事実をはっきりと直視すべきだ。人間という吹けば飛ぶような砂たる存在などは、今日では一般にもはや意志を持ったものとして認められないのだ。

勿論誰もみな私に反対した。なぜならこれは現実の経験で証明されることだが、人の心のなかに意識された危険に対する自己欺瞞の本能は、そのような危険はまったく事実無根であると宣言することによってすべてをかたづけようと一番したがるものだし、第一隣の部屋にもう豪華な晩餐の支度ができているのである以上、私がしたような安っぽい楽観主義（オプチミズム）に対する警告のごときは当然好ましからぬものと思われるのにきまっていたのだ。

ところが意外にもあのマリア・テレジア勲章の帯勲者が、私が誤った本能から自分に敵対するだろうと臆測していたほかならぬその男が、介添人として私の味方に立ってくれたのである。いや、戦争の資材である人間が戦争を欲するか否かということを今日なお考慮に入れるなどとはまったくのノンセンスだ、と彼は激しい口調で断言した。今度の戦争が起ればそれを事実上遂行するものは機械となり、人間はますます機械の一部といったものにされてしまうのだ。すでにこの前の戦争のときにも、戦場で戦争というものをはっきりと肯定し乃至ははっきりと否定する人を自分はそう多くは見なかった。大多数のものは風に吹飛ばされた埃の

ように戦争に捲きこまれてしまい、そうして巨大な渦巻のなかで手もなく翻弄されていたにすぎない。各個人は自分の意志など持たず、あたかも大きな嚢に入れられたえんどう豆のように左右に揺られていただけなのだ。全体として見れば戦争から逃亡した人間よりも戦争のなかへ逃避した人間の方がおそらく多いだろう。

私は奇異の念に打たれながら聞いていた。彼がさらにこう語りつづけたときの語気の激しさに、特に私は興味を唆られた。「私たちはどんな欺瞞にも踊れないようにしましょう。もし現在どこかの国でまったく別世界のもののような戦争、たとえばポリネシアかアフリカの片隅でおこなわれる戦争のため募兵の太鼓が鳴ったとしたら、数千人数万人の人々が駈けつけるでしょう、なぜ自分がそうするかということなどろくろく考えずに。いや、おそらくただ自分自身から、あるいは不愉快な事情から逃出したいという欲望だけでそうするのでしょう。しかし戦争に対する実質的な抵抗というものには、全然無価値だという以上の評価は私にはほとんど与えることができないのです。一つの組織に対する個人の抵抗は、或る流れにさらわれて行くことに要する勇気よりも遙かに高次の勇気、すなわち個人としての勇気をあらゆる場合必要とするものです。そしてこの種の勇気は着々組織化と機械化が進んで行く現代ではもはや死滅しました。私は戦争中ほとんど集団としての勇気、つまり隊伍のなかでの勇気という現象のみしか目撃し得なかった。そしてこの集団としての勇気という概念を拡大鏡の下において精しく調べてみると、これにはまことに異様な成分が発見されて来るのです。多量の虚栄心、軽率、のみならず倦怠すらそこにある。だが特にひどいのは恐怖です——そうですとも、後にのこされることに対する恐怖、嘲笑されないかという恐怖、単独に行動することについての恐怖、自分を他の連中の集団的衝動に対立させるようなあらゆるものに対する恐怖。戦場で最も勇猛果敢なものと見做されていた連中のほとんど大部分は、その後平服にかえってから個人として見ると甚だ疑わしい

勇士だったことが私にはわかりました。——どういたしまして」と彼は、これを聞いて渋面をつくった家の主人の方に鄭重に向きなおって言った。「決して私は自分を例外だとするのではありません」

彼の話をする態度は私には好意が持てた。そして私は彼と近づきになろうという気を起したが、しかしそのとき招待者側の夫人がもう晩餐に呼んだので、そしておたがいに大分離れた席に坐らせられたので、もはや私たちは話をする機会がなかった。やっと皆が席を立ったときになって私たちは携帯品を置く部屋で一緒になれた。

「あのお節介な男がもう間接に私たちを紹介してしまったものと思いますが」と彼は私にほほえみかけた。

私も同じようにほほえみかえした。「ええ、しかも徹底的に紹介してくれました」

「多分あの男は私がどんな剛勇無比の英雄かと物凄く大法螺を吹いたでしょうな、しかも私の勲章を自分がもらったような得意然とした様子で?」

「まあそんなところでしょう」

「そうです。あの男は私の勲章のことを途方もなく自慢しているのですよ——あなたの御著書のことを自慢しているのと同じようなもので」

「滑稽な男ですな! しかしもっと悪い奴もいます。とにかく——もしおいやでなければもうすこし御一緒に行かせていただきましょう」

私たちはそのまま歩いて行った。急に彼は私の方を向いて言った。

「私がこう申しても決して心にもないことを言っているのではないということを信じてください。私はもう何年も、私の好みからいえばあまり人目につきすぎるこのマリア・テレジア勲章のおかげで一番いやな思

いをしているのです。つまり、正直に申上げれば――当時戦線でこれを授与されたときには、勿論最初は何ともいえないほど感激しました。何といっても軍人となるように教育されて来たのですし、それに幼年学校ではこの勲章のことをまるで伝説のように聞かされていたのです。この勲章、これは一度戦争があったとしてもまあ十人ぐらいしかもらえない、したがって本当に天から星が落ちて来るようなものなのです。左様、二十八歳の若僧にはそれだけでもう実にいろいろの意味があるのですよ。一挙にして全軍の視聴を集め、誰も彼もが突然何かが小さな太陽のようにその人間の胸に輝き出したのを驚歎の眼をみはって眺める。そして畏れ多くも皇帝陛下が優渥なお言葉とともに握手してくださる。だが考えてごらんなさい、この栄誉はただ私たち軍人の世界でだけしか意味も価値もないのです。そして戦争が終ったときには、その後もなお一生のあいだ、かつてわずか二十分間だけ勇敢な振舞をしたというだけで英雄というレッテルを貼られて暮すことなど、私には滑稽なことのように思われたのです――それも多分ほかの数万の兵士たちより勇敢だったとはいえないのですから。私の方がただ自分の勇気を認められるという幸運、それから生きて帰還することができたというさらに稀有な幸運に恵まれていただけのことです。それから一年たって、どこへ行っても人々がこの小さな金属のかけらをまじまじとみつめ、それから敬意をこめておもむろに私の顔を見上げるようになると、もう戦争の生きた記念物といった風に見られながら長靴を履いて歩きまわっているのがどうにもこうにもいやになってしまいました。こうやって永久に人目を惹くのが不愉快でならなかったことが、終戦後私がすぐ平服に着換えてしまったことの決定的な理由の一つだったのです」

彼は前よりすこし性急に歩き出した。

「決定的な理由の一つ、と私は申しましたが、しかし第一の理由は、あなたにはおそらくいっそうわかり

やすいだろうと思いますが、或る個人的な事情なのです。つまり第一の理由は、私が自分にそうされるだけの資格があるかということを、そしてそもそも自分の英雄的行為というものを、徹底的に疑うようになったことなのです。すくなくとも私は自分の勲章を間抜け面して眺めている人間などよりも、およそ英雄などというどころか疑う余地のない非英雄というべき人間がこの勲章のかげにかくれていることをずっとよく知っていました——それは、或る絶望的な状態から脱出しようというもっぱらそれだけの理由で戦争の渦中に狂暴に身を投じた人間の一人、自己の義務感によって雄々しく戦った英雄というより自己の責任からの逃亡者の一人だったのです。あなたがたはどう思われるか私は知りません——すくなくとも私には後光や五彩の虹がかかった生活は不自然な我慢できぬものに思われます。ですから私は自分の英雄的生涯を物語るものを軍服の上にぶらさげて歩きまわらなくてもすむことになったのでほんとうにほっとしたのです。今でもまだ私は人から自分の過去の栄光をほじくりかえされると腹が立ちます。おかくしする理由もありませんから白状しますが、実はあのとき私はもうすこしで飛上ってあなたがたのテイブルに押しかけ、そんなにひけらかしたいのなら私ではなくて誰かほかの人のことをひけらかしてもらいたいとあのおしゃべりにどなりつけようと思ったほどだったのですよ。あの一晩じゅうあなたの敬意のこもった視線がまだ眼先にちらついてむかむかしていた。なろうことなら私はあの饒舌家の嘘を発くために、是が非でもあなたに私が実はどのような紆余曲折した道を辿ってあのような武勲を立てるに到ったかを聞いていただきたかったほどです——これは何しろ非常に奇妙な話なのです。けれどもとにかく勇気というものがしばしば方向を変えられた弱さにほかならぬ場合があるということが、これによって明かにされるでしょう。そればかりではなく——いや私はここで単刀直入その話をあなたにお聞かせすることも敢て躊躇しません。一人の人間の生涯のうちですでに四半

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert